病棟における認定看護師を活用した教育制度の導入

増田　江美　　梅木真理子　　林　千香子
和田　豊太　　杉山　倫代　　白鳥千恵美
水野　由美　　南條　久乃

静岡赤十字病院　3-4病棟

要旨:私が勤務する病棟は脳外科･神経内科を中心とした病棟であり，脳卒中リハビリテーション看護認定看護師，摂食・嚥下障害看護認定看護師が各1名勤務している．脳神経病棟としてスタッフが自ら学びを深め，積極的に専門性を身につける場として平成25年度より病棟師長を中心に各分野の病棟認定看護師を育成する教育制度(以下,病棟認定コーチ制度)を立ち上げた．病棟認定コーチ制度では認定看護師が講師となり直接専門性の高い看護を学び，認定看護師を補佐することのできる看護師（以下，認定コーチ）の育成を目的とした．認定コーチは各領域の認定看護師の専門分野について勉強会などで知識を習得し各認定看護師が定めるベッドサイドでのケアを含めた検定を受けて合格した者を言い，新人として入職した看護師や他院や他病棟からの異動者および患者さんやそのご家族に対する指導を行っている．今回病棟認定コーチ制度を立ち上げ，摂食・嚥下障害看護の認定コーチが3名誕生した．認定コーチ制度の概要と3名の認定コーチが誕生するまでの過程と活動について報告する．

Key words：認定看護師，認定コーチ制度，認定コーチ

Ⅰ．緒　言

脳神経病棟である当病棟では，脳卒中リハビリテーション認定看護師と摂食・嚥下障害看護認定看護師が各1名勤務している．そこで，脳神経病棟として病棟スタッフが自ら学び，専門性を身につける場として，また認定看護師がそれぞれの知識を伝える場として病棟師長を中心に認定コーチ制度というものを立ち上げた．病棟内のスタッフナースが認定看護師から専門性のあるケアを直接学び，それぞれの認定看護師を補佐できる病棟看護師を育成することが目的であり，病棟看護師が自分の得意分野を持ち後輩などの指導を行うことで病棟の看護の質の向上につなげることを目指した．認定コーチとは各領域の認定看護師の専門分野について勉強会等にて知識を習得し臨床でのケアを含め各認定看護師が定める検定を合格した者をいう．当報告では，認定コーチ制度摂食・嚥下障害看護コースを立ち上げた第1期とさらに継続してコーチ制度を進めた第2期開始までの経過を報告する．

Ⅱ．目　的

脳血管疾患の患者では急性期において60％に嚥下機能障害が出現するといわれている．その後時間の経過とともに症状は軽減していくが，約30％の患者に嚥下障害がみられ，慢性期まで残存する患者は5％といわれている．当病棟でも摂食・嚥下障害があり経鼻経管栄養を行う患者が多い．経口摂取の可能性の有無，適切な訓練方法の選択や誤嚥性肺炎の予防を目的として，スタッフが適切に嚥下評価を行うことができ，摂食・嚥下機能に関する知識を高めていくことが目標とされる．

Ⅲ．対象と方法

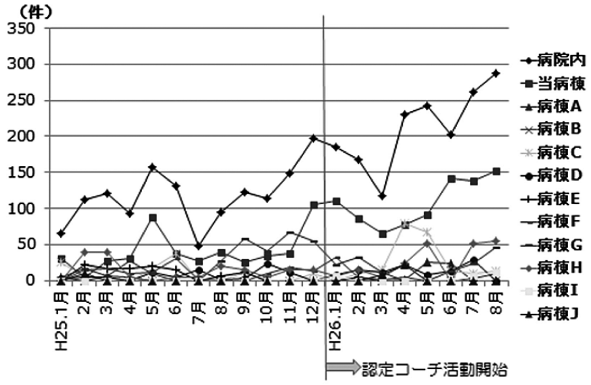
当病棟所属の看護師で認定コーチ制度摂食・嚥下障害看護コース第1期，第2期に受講の希望が

あった看護師計6名が対象者である．方法は，集合学習であり，参加体験型学習を盛り込んで臨床での看護場面の設定と実際の技術提供をする場を企画した．3ヵ月間，計3回の講義を行い，各講義終了後には確認テストを行った．第一回の講義では「口腔機能の理解ができ，正しい食事の介助方法を身につけ指導ができる」という目標のもと，口腔機能や食物形態，食事介助についての講義を行った．第二回の講義では「摂食・嚥下障害の原因を考えることができ，スタッフにアドバイスすることができる」を目標とした．嚥下に関する解剖生理や脳神経について，摂食・嚥下のメカニズムを学び，患者の障害を受けている部位が理解でき観察を行えるように講義をした．第三回の講義目標は「嚥下機能評価ができ，嚥下障害に対する訓練法を計画し実施，指導することができる」とし，具体的な訓練内容とその方法，摂食機能療法加算などについても学んでいった．3回全ての講義の後に最終確認テストを行い，合格した者が実践の研修に進んだ．実践の場では認定看護師の嚥下機能評価を見学し，その後指導下で嚥下機能評価を実践した．食事介助の方法についても同様とした．

Ⅳ．結　果

第1期の3名は平成25年の10月から講義を受け，平成26年の1月から実践を行った．現在ではそれぞれが脳神経科の患者の嚥下機能評価を行うことができるようになっている．認定看護師と協働し，嚥下機能評価を行い，摂食機能訓練の立案をし，作業療法士や言語聴覚士との連携をとることができている．第2期の3名は平成26年の7月から講義を受け，12月から実践を行っている．認定コーチとして活動を行っているスタッフに感想を聞いてみると，「摂食・嚥下障害看護の分野についてさらに興味を持つことができ，知りたいという気持ちが高まった.」「これまでも食事介助には気を付けてきたがさらに注意が必要であることや口腔ケアの大切さをあらためて感じた.」「自分の手技や知識にはまだ不安があり，スタッフへの指導までできるかが不安だが，この勉強をできて良かった.」「講義の時間が短く，知識を生かせるかが心配だが認定看護師と相談しながらできることをやっていきたい.」などの声が聴かれた．当院では平成25年度より摂食機能療法を導入しているが，この認定コーチ制度を導入後の当病棟の貢献度はグラフの通りである（表1）．平成26年1月以前は摂食・嚥下障害看護認定看護師が1人で脳神経病棟内の摂食・嚥下機能評価を行っており他病棟の患者も受け持っていたため，患者数も算定件数も多くはなかった．しかし，認定コーチ第1期が実践を開始した平成26年1月から当病棟の算定件数が増加していることがわかる．さらに，病棟のスタッフからはそれまで認定看護師が不在の日には嚥下機能評価や食事についての相談を認定看護師の次の勤務日まで先延ばしにしていたところ，認定コーチが誕生したことで患者に対してタイムリーに関わることができるようになったという感想が多く聞かれている．また，認定コーチと業務を行うことで自然と摂食・嚥下障害看護についての知識を身につけることができ，患者に合わせた食事介助の方法が選択できるようになってきている．

表1　摂食機能療法算定への貢献



Ⅴ．考　察

病棟認定コーチを立ち上げ，その第1段階として摂食・障害看護コースを導入した．3名の看護師が第1期として実践を含めた講義期間を終了し患者の嚥下機能評価と摂食機能訓練の選択を行っており，さらに第2期の3名が認定コーチとして活

動を開始し始める段階にある．当病棟での摂食機能訓練を行っている患者は着実に増えており，経口摂取が可能であると思われる患者に対し評価の対象として看護師サイドで問題点を抽出し積極的に介入できている．その結果早期から経口摂取を開始できる患者も増えてきていると考える．認定コーチは自分の担当した患者の経過を追っていくことが自らの評価にもつながっている．また，経験を積んでいくことで訓練の成果や経口摂取に移行していく患者をみる喜びがあり，周囲の看護師からも認知され，看護を行う上での自信にもつながっている．

さらに，病棟の患者に対し，自らの学んだ知識を持って関わることで「摂食・嚥下障害看護」を得意分野として病棟の看護の質の向上にも貢献していると思われる．今後は患者及びその家族への指導，スタッフ教育にも関わっていく予定である．

Ⅵ．おわりに

脳神経病棟としての看護の底上げを目的としての教育制度として認定コーチ制度を導入し，今回は摂食・嚥下障害看護コースの導入について報告した．認定看護師がスタッフに直接知識を伝える場として，病棟スタッフが専門性のあるケアを学ぶ場として有益であったと考える．病棟の専門性をふまえた得意分野を持った看護師が増えることで病棟の看護の質の向上につながっていると考える．